

官立大阪中学校の意義

神 辺 靖 光

はじめに

官立大阪中学校は1880（明治13）年12月、医学・理学（化学）の官立大阪専門学校が変ったものである。以後4年6ヶ月、日本唯一の官立中学校として中学校の基準づくりに努力したが、'85（明治18年）7月、大学分校となり、'86年、中学校令によって第三高等学校（旧制第三高等学校）になった。

官立大阪中学校の先行研究には二見剛史氏の「明治前期の高等教育と大阪中学校」⁽¹⁾、四方一瀧氏の「『中学校教則大綱』学科課程の成立に関する一考察——官立大阪中学校の発足とのかかわりからみた——」⁽²⁾、「官立大阪中学校『教授要旨』に関する一考察」⁽³⁾がある。本論はこれらの論文に多くの示唆を受けながら中学校形成史上の意義を考察するものである。

本論中の太政官布告、文部省布達、同達等は内閣官報局編『法令全書』による。なお当時は大阪・大坂が混用されているが大阪に統一する。

1

1877年、愛知・広島・長崎・新潟・宮城の官立英語学校が廃止された時（明治10年2月19日文部省布達1号）、東京英語学校は官立東京開成学校予科と合併して東京大学予備門となり⁽⁴⁾、そのまま継続したのは官立大阪英語学校だけであった。大阪英語学校は愛知・広島・長崎英語学校生徒の希望者を引き受け充実に務めた⁽⁵⁾。しかるに大阪英語学校は'79年4月、大阪専門学校と改称（明治12年4月4日文部省布達3号）、理学・医学の官立専門学校になった⁽⁶⁾。同年2月まで英語学校次学期の作業をしているから⁽⁷⁾この改変は唐突なものであった。文部省は'78年頃から専門教育の振興を訴えはじめた⁽⁸⁾。同年における公立私立専門学校数は62校⁽⁹⁾、これまで最高の官立専門学校であった東京開成学校と東京医学校は'77年合併して東京大学になったから（明治10年4月12日文部省布達2号）官立専門学校は空白になっていた。大阪英語学校の淵源は大阪舎密局（物理化学研究所）であるから当時、需要の高かった医学・化学の官立専門学校に変更するという着想は意表外ではない。

'79年4月、東京大学予備門主幹兼東京大学法理文学部綜理補・服部一三が大阪専門学校長となり、9月から授業を開始した⁽¹⁰⁾。大阪専門学校は医学・理学（化学）の専門学校であるが、これを本科として別に4年制の予科（普通学）を置いている。「本校ノ旨趣ハ邦語ヲ用キ教授スルヲ以テ目的トスレドモ現今姑ク英語ヲ専用ス」（大阪専門学校規則〈明治12年9月〉）⁽¹¹⁾。してみると従来の英語学校は予科として引き継がれたのである。'79年の『文部省第七年報』は言う。「本年四月、文部省所轄大阪英語学校ヲ改メテ大阪専門学校トシ理学医学の二科ヲ置キテ之ヲ本科ト為シ更ニ本科ニ登ルベキ普通科ヲ置キテ之ヲ予科ト為シ其学期ヲ各々四年ト定メ本科規則ハ将ニ次学年ノ始ヨリ実施セントス（中略）生徒ハ予科生一百五十一名アルノミニシテ絶エテ本科生ナシ。是レ生徒ノ学力未ダ本科ヲ修ムルニ達

セザル所アルヲ以テナリ」⁽¹²⁾『史料・神陵史』は'79年末の生徒数を本科医学生7名、同化学学生3名、予科生201名としているが⁽¹³⁾、いずれにしても医学・化学の専門教育は緒についたばかりで実態は旧英語学校であったと言える。

大阪専門学校は学校通則・教則を整え⁽¹⁴⁾、充実に務めたが、'80年4月、体操伝習所主幹・折田彦市が大阪専門学校長に任ぜられ、服部一三は東京大学三学部総理補に戻った⁽¹⁵⁾。こうした時、またしても突如、大阪専門学校は廃止となり、官立大阪中学校と改称された(明治13年12月16日文部省布達2号)。⁽¹⁶⁾'80年12月、文部省は太政官へ次のような伺をたてている。

大阪専門学校は「漸次拡張の見込ヲ以テ夫々着手中ニ候処、来十四年度以降外国ニ関スル費用ノ節減セラレ候ニ付、此際非常之方法ヲ設クルニ非ザレバ支弁ノ目途難相立、依テ本省一般ノ節減方法ニ於テハ諸学校ヲ始メ学事上ノ取捨得失等彼此篤ト商量、即今取調中ニ有之候得ドモ差向キ本校ノ儀ハ此儘維持スベキ目途無之場合ニ立到候ニ付、不得止該校ノ範囲ヲ縮小シテ従来所用ノ機械書籍等ヲ転用シテ外国教師の傭解キ我邦人ヲ以テ之レニ代ヘ更ニ邦語ヲ本トシテ交ユルニ英語ヲ以テ中学校並ニ大学予備ノ学科ノミヲ教授シ大学予備学生ノ欠ヲ補ヒ又ハ各地方中学校ノ模範ト致シ候ハバ現今ノ急務ニ適シ可申ト存候」そして「一日ヲ緩ニスレバ一日ノ損ヲ来タシ片時モ難擱儀ニ付、先以本校改正処分ノ儀至急仰高裁候也」と結ぶ。12月10日に「伺之趣聞届候事」との指令があった。文部省はこれを受けて13日、大阪専門学校の廃止と大阪中学校改称を上申したのである⁽¹⁶⁾。いかにも性急な決定であった。文部省の一方的裁量で大阪専門学校に一片の相談もなかったことは'81年12月・福岡文部卿宛大阪専門学校長折田彦市の次の一文でもわかる(大阪中学校年報序文)⁽¹⁷⁾。

「抑彦市乏ヲ此校長ニ承ケ任ニ大阪ニ赴キシハ実ニ去年五月ノ事ニシテ新任日尚深カラザルニ偶理學廃止ノ命ヲ受ケタリ。爾後専ラ医学拡張ノ事ニ従ヒ乃本科教則ヲ撰シ乃病院地所ヲ相シ給費生徒ヲ増置シ実地解剖ヲ開始シ経営百端校声四聞入学ヲ請フ者陸續絶ヘズ。生徒ノ氣大ニ振ヒ進學ノ功益著ク事漸ク成ルニ近シテ其年十二月忽チ本校改称ノ挙ニ遭ヒ企図計画スル処頓ニ全ク廃ス」⁽¹⁷⁾。

改変の理由は経費の逼迫であったが、文部省はこれに大学に接続する模範中学校の役割を期待したのであった。

2

'80年12月17日、東京から帰阪した大阪中学校長折田彦市は翌'81年3月までに旧専門学校教員の中から適任者を選んで大阪中学校教員に委嘱するとともに専門学校教員米国人フレジール、英国人フレーザー、米国人ウオルフの3名を解任した⁽¹⁸⁾。また旧専門学校生徒のうち21名を東京大学医学部別科生に、15名を東京大学法理文学部に転学させ⁽¹⁹⁾、残存者を暫定措置として英語中学生とした。

「更ニ邦語英語ノ両中学ヲ置クノ旨趣ニ因テ教則ヲ仮定シ生徒ノ医学ニ志アルモノハ之ヲ紹介シテ東京大学医学部ニ送り其法文学ニ転ゼント欲スル者ハ亦紹介シテ東京大学ニ送り其残レル者ヲ挙ケテ英語中学生トナシ仮教則ニヨリテ之ヲ教授シ務メテ萎靡セントスルノ氣象ヲ鼓舞振興セリ」(前出・大阪中学校年報序文)⁽²⁰⁾。

つまり邦語中学と英語中学の二課程制を方針としたが、まず仮教則をつくって英語中学

だけを発足させたのである。それは大阪英語学校から引き継いだ大阪専門学校予科生徒の受け皿を作らなければならなかったからである。文部省は模範中学校づくりを期待したが、現実に生徒を抱えている学校長としては教育の断絶は許されず、継続的に教育する責務があった。折田校長の苦心はここにあった。’81年2月につくった英語中学の暫定学科課程⁽²¹⁾は一年間を一級として予科1級本科4級の5年制。1級1年を3学期制としてとりあえず4月14日までを2学期、4月15日から7月10日までを3学期としている。1級1年3学期制は後に尋常中学校→中学校で採用したもので、この時期としては特異なものである。’81年6月13日、「大阪中学校英語科教則」を文部省に上伺した⁽²²⁾。

一、英語科ハ専ラ英語ヲ以テ之ヲ授ケ英語専用ノ専門学校ニ入ルノ階梯トス。但本科卒業ノモノハ試験ノ上大学予備門第一級ヘ入ルヲ得ベシ。

一、本科卒業ノモノニハ卒業証書ヲ附与スベシ。

一、本科課程ヲ五学年トシ、又毎学年ヲ分テ三学期トス。

後に用いられる学年という新しい概念が目を引くが、これに対する文部省の回答がでるより早く「中学校教則大綱」(明治14年7月29日文部省達28号)がでた。「教則大綱」は英語中学を認めない。しかし英語学校を引き継いだ大阪中学校としては英語専修を志願した現生徒の方向を誤らせたくない主張する⁽²³⁾。両者折衝の結果、’82年11月16日、文部省より次の回答を得た⁽²⁴⁾。

一、名称ハ大阪中学校附属英語科ト可相称事。

一、但本科ハ中学科制定以前ニ入学セシ生徒ノ為メニ暫ク之ヲ存置スルモノニシテ自後補欠ト雖モ一切生徒ノ入学ヲ許サズ(2項略す)

あくまで英語科は経過措置として認められたものであった。英語科は’83年7月、6名の卒業生を出して消滅した⁽²⁵⁾。

大阪中学校に期待されたものは「中学校教則大綱」にもとづく模範中学校を具現することであった。’82年2月25日、「大阪中学校規則」をつくって文部省に伺いをたてた⁽²⁶⁾。『史料・神陵史』によれば、これは4月8日付で文部卿から裁可されたが、なお普通学務局と「諸条疑」について協議を整え、5月頃、大略がなり、7月11日に決定したとある⁽²⁷⁾。2月25日伺の「規則」は総則、教授規則、入学規則、試業規則及卒業証書、生徒心得、授業料、奨学金規則、図書室規則、器械室規則、寄宿舍規則、罰則の11章全92条からなる。完成とされる同年7月の「大阪中学校一覧」はさらに沿革略、教科細目、職員生徒の氏名等を加えたものである⁽²⁸⁾。

「中学校教則大綱」は「土地ノ情況」により高等中学校に代えて普通文科、普通理科、農業・工業・商業の専修科を置くことができるとしているが、大阪中学校は独自の官立中学校であるから初等中学科と高等中学科の二科からなっている。「教則大綱」の各条文に当る部分は「大阪中学校規則」の総則(第1章)と教授規則(第2章)に分割されている。両者の異なる部分を併記すると次のようになる。

〔大阪中学校規則と「中学校教則大綱」対照表〕

官立大阪中学校規則（明治15年7月制定）

当校ハ文部省ノ所轄ニシテ中人以上ノ業務ニ就クガ為メ又ハ高等ノ学校ニ入ルカ為メニ必須ノ学科ヲ授クル所トス（第1章・総則第1条）

当校教科ハ初等及高等ノ中学科トス（第2条）

初等中学科卒業ノ者ハ高等中学科ヲ修ムベキモノトス。但本科卒業ノ者ハ亦師範学科諸専門ノ学科等ヲ修ムルコトヲ得（第3条）

高等中学科卒業ノ者ハ広ク士人中正ノ業務ヲ執リ又大学科高等専門学科等ヲ修ムルコトヲ得。但大学科ヲ修メントスル者ハ当分ノ内尚必須ノ外国語学ヲ修ムルヲ要スル事アルベシ（第4条）

当校ノ生徒タルコトヲ得ル者ハ男子ニシテ品行端正身体健康小学中等科卒業以上ノ学力アル者タルベシ（第6条）

修業年限ハ初等中学科ヲ四箇年トシ高等中学科ヲ二箇年トシ通シテ六箇年トス（第2章・教授規則第3条）

中学校教則大綱（明治14年7月29日）

中学校ハ高等ノ普通学科ヲ授クル所ニシテ中人以上ノ業務ニ就クカ為メ又ハ高等ノ学校ニ入ルカ為メニ必須ノ学科ヲ授クルモノトス（第1条）

中学科ヲ分テ初等高等ノ二等トス（第2条）

初等中学科卒業ノ者ハ高等中学科ハ勿論普通文科普通理科、其他師範学科、諸専門ノ学科等ヲ修ムルヲ得ベシ（第8条）

高等中学科卒業ノ者ハ大学科、高等専門学科ヲ修ムルヲ得ヘシ。但大学科ヲ修メントスル者ハ当分ノ内尚必須ノ外国語学ヲ修メンコトヲ要ス（第9条）

初等中学科ヲ修メントスル生徒ハ小学中等科卒業以上ノ学力アル者タルベシ（第10条）

中学校ノ修業年限ハ初等科ヲ四箇年トシ高等科ヲ二箇年トシ通シテ六箇年トス。但此修業年限ヲ伸縮スルコトヲ得ベシト雖モ一箇年ヲ過グベカラズ（第11条）

「大阪中学校規則」（以下「規則」という）が「初等中学科卒業ノ者ハ高等中学科ヲ修ムベキモノトス」と二課程必修を決めているのに対し、「中学校教則大綱」（以下「教則大綱」という）は「高等中学科ハ勿論、普通文科普通理科其他師範学科、諸専門ノ学科等ヲ修ムルヲ得ベシ」と初等中学科卒業後の進路を多様なものに表現している。初等科のみで終わってもよいようにもとれる。後に初等科のみの中学校が認められた（明治17年7月2日文部省達6号）。「規則」は大学進学を目指しているから高等中学科進学を必須としている。修業年限の伸縮（「教則大綱」11条）も「規則」にはない。この時期、中学校を女子にも開く考えが積極的にあったと思われぬが「教則大綱」に男子の文字がないが「規則」は入学条件を「男子ニシテ品行端正身体健康」としている。「教則大綱」の「中人以上ノ業務」はさまざまに解釈できるが「規則」のそれは高等中学科を卒業して「広ク士人中正ノ業務を執」ることとしている。

「中学校教則大綱」は学科と修業年限、学科別学年学期別週時間を例示しただけで、各科の教授要旨、教授内容まで書き込んだ「小学校教則綱領」（明治14年5月4日文部省達12号）と異なる。「大綱」たるゆえんである。「大阪中学校教則」は「教則大綱」に則りながら「授業ノ要旨」や授業内容、教科書、教具まであげている⁽²⁹⁾。「授業ノ要旨」⁽³⁰⁾は膨大なものであるからここでは収録できない。「各級ノ学科課程及教科用図書」一覧を再構成して学科別にその内容と教科書、教具をみよう。

〔大阪中学校学科別授業内容・教科書・教具〕

〔 〕内は教科書

初等中学科

修身……嘉言善行（孝経・小学内編・中経・小学外編・論語）

和漢文・読書…日本文法・近易ノ漢文・和文・漢文〔日本文典・小品文鈔・源平盛衰記・正文文章軌範・春秋左氏伝・謝選拾遺〕

・作文…仮名交り文・書牘文・漢文

英語……綴字・書取・読方・訳読・習字・文法・読書・作文〔ウィルソン綴字書・サーゼント第1読本～同第3読本・チャンパー第1読本～同第5読本・コックス文法書・ブラウン文法書・セクスピリヤンリードル〕

算術……加減乗除・分数・少数・諸比例・百分算・開平・開立・級数求積〔筆算摘要〕

代数……整数四術・分数四術・方程式（一次方程式・乗方・方根・方根数・二次方程式等）順列・錯列・級数〔代数学〕

幾何……平面幾何総論・直線・角・多角形・平面幾何・比例・円・応用・立体幾何（面ノ交接・立体・幾何ノ応用・常用曲線）〔幾何学原礎・軸式円錐曲線法〕

地理……総論・日本地誌（総論・畿内・東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道・北海道）万国地誌（亜細亞大陸・欧蘭巴・亜仏利加・亜米利加・亜西亜尼亞）地文（地球・地皮・陸・水・大気・生物・物産）〔輿地誌略・日本地誌要略・地理論略〕

歴史……日本史（神代ヨリ平氏ノ末ニ至ル・頼朝総追捕使トナルヨリ豊臣氏ノ末ニ至ル・家康將軍トナルヨリ現時ニ至ル）支那史（太古ヨリ五代ニ至ル・宋ヨリ今代ニ至ル）万国史（上古史・中古史・近世史）〔神皇正統記（口授用）・皇朝史略・続皇朝史略・続々皇朝史略・十八史略・続八史略・泰西史鑑上・中・近世西史綱記・続西史綱記〕

習字……楷書・行書・草書〔楽志論・陳情表・出師表〕

図画……自在画法・用器画法〔図画範本〕

動物……総論（分科法・構造・發育殊性・慣・効用等）〔テキストブックオブゾーロジー〕

植物……総論（分科法・構造・發育殊性・効等）〔普通植物学〕

物理……大意〔改正物理全誌〕

生理……総論・骨格・筋肉・皮膚及消化・循・呼吸等ノ諸器并ニ其効用養生法・感覚器及神経等〔カットル氏生理養生論〕
 化学……無機化学大意〔小学化学書〕
 経済……総論・生財・配財・交易・貨幣附銀・租税〔宝氏経済学・厚生学〕
 記簿……単式〔馬耳蘇氏記簿法〕
 体操……美容術・徒手及啞鈴演習・啞鈴及棍・球竿演習・珠竿及木環演習・木環ノ鞞・行桿斜梯演習・歩兵操練ノ初歩
 高等中学科
 修身……人倫ノ大道〔大学・中庸・近思録〕
 和漢文・読書…漢文〔唐宋八大家文格・古今・三体詩〕
 ・作文…漢文・詩・歌・文
 英語……修辭・読書・作文・名家詩文〔クエケンボス作文修辭書・スケッチブック・イングリシリタラチュール〕
 三角法……八線変化・対数用法・三角実算〔三角新論〕
 金石……金石総論（分科法・硬生・形状其他ノ性質及効用産地等）地質学大意〔金石学・勞氏地質学〕
 物理学……総論・重学・熱学・聴学・視学・電気学・磁気学及気象大意〔士都華氏物理学・改正物理全誌〕
 化学……総論・非金属・金属・有機化学大意〔羅斯珂氏化学書〕
 記簿……複式〔馬耳蘇氏記簿法〕
 図画……自在画法・用器画法〔図画範本〕
 本邦法令……現今ノ法令〔類聚法規（暫ク口授）〕
 体操……啞鈴・棍棒・球竿・木環及鞞・行桿・斜梯演習・歩兵操練ノ初歩
 （『史料・神陵史』 pp441～450 によって作成）

大阪中学校使用の教科書、学科別「授業ノ要旨」は『文部省日誌』⁽³¹⁾に掲載されたので全国の中学校関係者の目にふれたはずである。

4

大阪中学校は全国中学校の模範学校たることを期待されたが、更にそれを建設するのではなく、現実に在籍する生徒、過去教育経歴を背負った生徒を教育しながら模範学校に変えてゆかねばならなかった。折田彦市校長はそうした現実と使命を理解した実践者であった。’81年12月、折田は「将来ノ要務」として次の5項目をあげている。「其最急務ナル者ヲ叙センニ幼年生徒寄宿舎ヲ開設スル其一ナリ。体操課ヲ振起スル其二ナリ。変通教授法ヲ施ス其三ナリ。授業法ヲ改良スル其四ナリ。植物場ヲ開拓シ及動物金石等ノ標本ヲ蒐輯スル其五ナリ。適応ノ教科書ヲ採択スル其六ナリ」⁽³²⁾。

幼年寄宿舎とは15歳以下の少年生徒を高年生徒と別宿させることである。従来の中學寄宿舎での弊害を折田は各地中学校の実地視察から感じとったのである⁽³³⁾。体操科について折田は次のように言う。およそ教育に従事する者で体操を度外視する者はないが「其方法

善良ナラズ其器械整備セズ徒ニ生徒ヲ束縛シ却テ生徒ヲシテ倦厭ノ氣ヲ生セシメ体操課ヲ嫌惡セシムルニ至ル。是故ニ幼年生徒ハ専ラ粗暴ニ流レ長年生徒ハ漸ク柔弱ニ陥リ随テ學業進歩ノ遲鈍ヲ見ハスノミナラズ往々疾病ヲ醸成シテ廃學スルニ至ルモノアリ。蓋体操課ヲ勉メザルノ致ス所ナリ」⁽³⁴⁾と。そこで旧司藥場を1,700円で体操場に改装し⁽³⁵⁾、洋琴(オルガン)を備え、生徒には隊列を整えさせて「一挙手一投足屈伸動作」をリズムに合わさせた。はじめこれを嘲笑した生徒もやがて「手ノ舞足ノ踏ヲ知ラ」ざるようになり「其結果ハ疾病者漸ク少キヲ致セルノミナラズ食慾頓ニ進ミ(中略)為ニ寄宿生徒ノ食糧ヲ増益スル」に至ったと報告している⁽³⁶⁾。「中学校教則大綱」では「体操ハ適宜之ヲ課スベシ」となっているが、大阪中学校の体操は前掲した如く、啞鈴、棍棒、球竿等を教材としたリールランド流であった。前体操伝習所主幹折田彦市の面目が窺われる。折田はさらに生徒の身長活力を測定する活力統計表をつくらせたり⁽³⁷⁾、スナイドル銃50挺を購入して歩兵操練も体操科に加えた⁽³⁸⁾。

変通教授法とは年齢・学力不均衡の生徒を等級制カリキュラムに適應させる工夫である。折田は言う「是レ本校生徒ノ中、年齢較長ジ、学力偏短ニシテ直ニ中学ノ正規ヲ履ムニ便ナラザルモノノ為、特ニ設クル所ニシテ即暫ク偏長ノ学科ヲ惜キテ専ラ偏短ノ学科ヲ修メシメ諸科ノ学力漸ク平等ナルヲ待チテ然後更ニ正規ノ中学等級ニ編入スルノ方法ナリ」と⁽³⁹⁾。これらは「本学年ニ於テ已ニ殆ト其成功ヲ見ルヲ得タリ」とされている⁽⁴⁰⁾。

授業法の改善は毎月一回の教員集会で従来の専門学科の教授観から普通学科の教授観へ転換をはかり、金石標本は東京大学に、動物標本は東京教育博物館に托してこれらを蒐集した⁽⁴¹⁾。教科書の選定は前掲の通りである。

大阪城外大手町にあった校舎に手を入れ、体操場、寄宿舍、教室、会堂(後の講堂)等を改造、増築していった。別表にみる営繕費がそれである。大阪中学校の他校にない特徴は外国語を含む図書、掛図、標本類の蒐集である。模範中学校になるためであるが、別表の教場費がそれである。'81年当時7,219冊であった洋書は'84年には8,303冊になり、1,360冊であった和漢書は2万4,968冊になった。地球儀をはじめ洋学図表等100点、和漢学用掛図等71点になった。'80年〜'81年の支出総計が突出しているのは外国人教師の解雇を含む大阪専門学校から大阪中学校への転換のためである。官立大阪中学校の年間経費は2万4,000円から3万8,000円ぐらいであった。1883年当時の府県立中学校で一校一ヶ年の歳費が1万円を超えるものは新潟学校、山梨徽典館、岐阜華陽学校、岡山県師範学校同中学校、群馬県中学校であるが、新潟・山梨・岐阜・岡山のそれらはいずれも師範学校と一体のものである。ひとり群馬県中学校が1万2,576円22銭2厘という高額の歳費であるが⁽⁴³⁾、官立大阪中学校には遠く及ばない。

〔官立大阪中学校経費(支出)一覧〕

	経費(支出)総額	教場費	営繕費	出典
1880年9月〜'81年8月	5万2,091円30銭5厘	3,085円17銭3厘	8,793円35銭8厘	文部省「第9年報2」p685
1881年8月〜'82年8月	2万4,266円24,3	7,539円62,8	3,128円23,0	「第10年報2」p810
1882年8月〜'83年8月	3万7,975円82,2	1万0,990円29,7	5,755円20,9	「第11年報2」p817
1884年1月〜'84年12月	2万8,119円52,2	4,195円64,2	7,090円01,7	「第12年報」p497

生徒数は'80年12月90名, '81年9月109名, '82年8月99名, '82年12月143名, '83年12月219名, '84年12月268名である⁽⁴⁴⁾。しかし, '84年2月における進級試験時は総員205名が初等中学科で高等科は0, 同年7月の進級試験で漸く3名の高等科4級受験者があり, 全員合格進級した。初等科の生徒総数は246名であった⁽⁴⁵⁾。因みに'81年から'82年にかけての生徒中, 大阪府在籍者は全体の41%, 士族40%, 平民60%である⁽⁴⁶⁾。当時, 生徒数200名を越える府県立中学校は, 東京, 京都, 佐賀, 徳島等かなりみられる⁽⁴⁷⁾。官立大阪中学校はその経費の割には生徒は多くなかった。授業料は1学期(6ヶ月)1円⁽⁴⁸⁾, これも決して高額とは言えない。官立中学生は後の官立高校生, 大学生同様に優遇されたのである。

'85年2月と7月に進級試験があった。2月の受験者は在籍251人中230人, 及第者は190人, うち初等科全科卒業者は7名, 高等科には4級8名, 2級3名の計11名在籍となった。7月の受験者は在籍260人中206人, 及第者は136人, うち初等科全科卒業者は8名, 高等科在籍は4級8名3級1名の計9名になった⁽⁴⁹⁾。'85年7月10日, 2月, 7月の初等科卒業生のための卒業証書授与略式を行った⁽⁵⁰⁾。そうしたところへまたまた突然の大阪中学校を改めて大学分校にするとの文部卿達が届いたのである(明治18年7月12日)⁽⁵¹⁾。

同年6月(日欠)の三条太政大臣宛・大木喬任文部卿の「大阪中学校組織改更之儀伺」は次のように述べている。「近來普通教育逐次上進シ, 子弟ノ高等教育ニ就クベキ者漸ク増加候処(中略)当省大阪中学校ノ儀ハ從來各地方中学ノ模範ニ供スルノ旨趣ヲ以テ持統致来候得共, 今日ニ在テ右高等学校ノ須要ニ比スレバ稍軒輊モ有之候ニ付, 今般該校ノ組織ヲ変更革シテ大阪大学部校ト改称シ逐次法理医文高等ノ学科ヲ設置シー大学トナスノ見込ヲ以テ差向予備科及一二高等学科ヲ設置致度, 此段相伺候条至急仰裁可候也」⁽⁵²⁾。将来の大学設置のための高等学科(高等学校?)とその予備科に変更したいという趣旨である。

これに対する大阪中学校の対応は早かった。'85年の「大学分校年報」は簡潔に述べている。「九月, 旧大阪中学校生徒総計二百五十九人ノ内統テ在学ヲ望ム者二百四十六人ヲ以テ予備科第二級第三級及別課予備科第一級第二級ヲ編制シ之ニ新募ノ生徒百二十一人ヲ加ヘ始テ大学分校ノ教科ヲ授ク。抑当校曾テ大阪専門学校タリシヲ大阪中学校ト改称セラレシニ当リテヤ旧生徒ノ退学スルモノ陸續接踵其遺留スル者モ自ラ安堵修学シ得サルノ情勢アリシガ今日ハ之ニ反シテ大ニ生徒進修ノ精神ヲ鼓舞シ随テ退学ヲ乞フ亦甚少シ」⁽⁵³⁾。旧大阪中学校の等級と大学分校のそれを対照すると下記のようなになる。

〔大阪中学校・大学分校等級対照表〕

大阪中学校	初 等 中 学 科								高等中学科	
	第8級	第7級	第6級	第5級	第4級	第3級	第2級	第1級	第4級	第3級
大 学 分 校	大学別科予備科				大 学 予 備 科					
	第2級		第1級		第3級			第2級		

(『文部省第13年報2』p379所収の「生徒在学退学一覧表」による)

大学分校とは言うものの, 予備科とその下の予備科である別科予備科だけを発足したのである。これは中学校令下の高等中学校に持ち越される形態であった。またこの変更にとまって6ヶ月1級制は1年1級制となり, これも次期に持ち越されたのである。

’85年12月12日、大阪中学校長折田彦市以下全教職員が大学分校の官職についた⁽⁵⁴⁾。

おわりに

官立大阪中学校は全国中学校の模範学校として文部省の期待を背負って発足したものである。やや遅れて「中学校教則大綱」が発せられたが、それは「小学校教則綱領」と違って教授要目が欠けていた。文字通りの「大綱」であった。これに教授要目を盛り、教科書、教具教材を示してはじめて実践し易い教則になる。教授要目は文部省によって修正されるが、本論で述べた通り、これらに果した大阪中学校の役割は大きい。しかし折田校長をはじめ大阪中学校が目ざしたそれは大学進学予備教育のための中学校であった。中学校の目的の一つである「中人以上ノ業務」についてはなんらの考慮も払われていない。大学進学に挫折した者が「中人以上ノ業務」に就く。それにも役立つ教授要目と解釈される。

- (1) 「教育史学会紀要・日本の教育史学17集」1974年10月
- (2) 国土館大学教育学会「教育学論叢3号」1985年12月
- (3) 国土館大学人文学会「人文学会紀要19号」1985年7月
- (4) 『東京大学百年史・通史編1』p551
- (5) 「大阪英語学校年報 自明治9年9月 至同10年8月」(『文部省第5年報1』pp438-440)
- (6)(7)(10) 「明治12年・大阪専門学校年報」(『文部省第7年報』p379)
- (8)(9) 「文部省第6年報」p16
- (11)(13)(14) 「史料・神陵史」p377, pp404~405, pp377~378
- (12) 「文部省第7年報」p15
- (15) 「明治13年・大阪専門学校年報」(『文部省第8年報2』p478)
- (16) 「太政類典第4編」(『編集復刻 日本近代教育史料大系第4巻 公文記録(1)太政類典1』p336)
- (17)(18)(19)(20) 「大阪中学校年報 自明治13年9月 至同14年8月」(『文部省第9年報2』p681, pp683~684, p684, p681)
- (21)(22)(23)(24)(25) 「史料・神陵史」pp428-433 所収, p434, p434, p435, p468
- (26) 「文部省日誌・明治15年第24号」(『明治前期文部省刊行誌集成4』pp273-285), 「大阪中学校年報 自明治14年9月 至同15年8月」(『文部省第10年報2』pp794-802)
- (27)(29)(30) 「史料・神陵史」p435, pp441-451, pp452-457
- (28) 「大阪中学校一覧」 從明治16年9月 至明治17年8月) 京都大学総合人間学部図書館・舎密局~三高資料室蔵, 『史料・神陵史』pp437~467 に区分収録されている。
- (31) 「文部省日誌」明治15年24号(『明治前期文部省刊行誌集成4』pp274~277) 同明治15年44号(同前5 pp49-52)
- (32)(33)(34) 「大阪中学校年報 自明治13年9月 至同14年8月」(『文部省第9年報2』p687, p688, p688)
- (35)(38)(48)(52) 「史料・神陵史」p485, p469, p465, p509
- (36)(37)(39)(40)(41)(46) 「大阪中学校一覧 從明治14年9月 至同14年8月」(『文部省第10年報2』p802, p802, p794, p810, p810, p804)
- (42) 「大阪中学校年報 自明治13年9月 至同14年8月」(『文部省第9年報2』p686) 「大阪中学校第15回年報」(『文部省第12年報』pp492-494)
- (43) 文部省専門学務局・普通学務局「府県立学校表・明治16年7月調」(筑波大学中央図書館蔵)
- (44) 『文部省第9年報2』p686, 『同第10年報2』p804, 『同第11年報2』p810, 『同第12年報』p490
- (45) 「大阪中学校第15回年報」(『文部省第12年報』pp488-489)

(47) 『文部省第9年報』～『同第12年報』収載の「中学校表」による。

(49)(50)(51)(53) 「大学分校年報・明治18年」(『文部省第13年報2』 pp375-777, p379, p374, p378, p375)